様式４

令和4年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議　参加報告書　兼　アンケート

参　加　会　議：	第7回会議（経済学分野）
所属機関・部局・職名：	武蔵大学経済学部専任講師
氏　　名：	原朋弘

1．ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3 名程度）を挙げ、記載してください。〕
Josh Angrist 教授: 私の研究の中心でもある実証ミクロ経済学で 2021 年にノーベル賞を受賞された Angrist 教授の講演の前半では、ノーベル賞授賞理由でもある因果推論の経済学への応用についての概論であった。大学教員として今後因果推論を教えることは多々あるため、本講演の明快でウィットに富んだ解説は自分の授業の進め方を考える上で非常に参考になった。講演の後半は Angrist 教授が現在行っている最新の研究(米国ネブラスカ州の公立大学進学システムにおける奨学金の効果推定)の解説であった。単純な因果推論から一歩踏み込み、検証した効果の背後にあるメカニズムを理解するために利用した Visual Instrumental Variable(VIV)の解説が非常に興味深かった。幅広い実証ミクロ研究に今後応用されるであろう方法論を著者本人の口から解説として聞くことが出来たのは非常に幸運であった。私自身の研究への応用可能性についても積極的に考えてきたい。 **Robert Aumann 教授**: 2005 年にノーベル賞を受賞された Aumann 教授の講演は、ノーベル賞授賞理由となったゲーム理論の理論構築に関する議論ではなく、近年研究が進みつつある行動経済学と一般的な経済学の関係性について議論するものであった。「行動経済学は時として『異端』として捉えられるが、実際は一般的な経済学と何ら矛盾していない」という内容を複数の行動経済学の研究事例を紹介しながら解説されていた。彼の引用する論文の多くが同じくリンダウ会議に参加していて行動経済学でノーベル賞を受賞した Richard Thaler 教授のものであったこと、ご本人も非常に楽しそうにお話しされていたことから、会場が一番盛り上がった非常にエンターテイニングな講演だった。92 歳というご高齢ながら最新の研究情勢を追い自らの視点で議論する知的好奇心を失わない姿勢がとても印象的であった。 **Paul Milgrom 教授**: オークション理論やメカニズムデザインの電波オークション等への応用で 2020 年にノーベル賞を受賞された Milgrom 教授の講演は、現在も遂行中のメカニズムデザインの水資源配分への適応についてであった。現実社会において困難な課題であり、資源の配分を改善することで社会厚生を改善することが出来るセッティングを見つけることが出来る才能があるだけでなく、実際にメカニズムデザインを社会に適応する際の問題点(既存企業の反発など)を乗り越えて効率的な資源の配分の実装まで実現している一貫した姿勢に感銘を受けた。

２．ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流（食事、休憩時間やエクスカーション等での交流）の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3 名程度）を挙げ、記載してください。〕
Eric Maskin 教授: 昼食時にお話をすることが出来た。近年 Maskin 教授が研究されている選挙制度の構築に関して非常に洞察に富んだお話を聞いたうえで、私を含む会議参加者が課題に感じている各国の選挙制度について深く議論を交わした。私が質問したのは、民主主義の根幹を成す多数決において、文化的マイノリティが自分たちの声を届けるにはどのような仕組みが望ましいと考えられるかについてである。この点を議論したかった理由は 2 点ある。一点目は、近年多くの国で導入されている一般的な多数決においても、Maskin 教授が近年理論研究で示した効果的な投票方法であるボルダルールにおいても、マイノリティの声が組み込まれることは少ないと考えたからである。二点目は、私自身の研究が、文化多様性と国家統合のバランスがどのようにして取られているかをデータに基づいて議論しているからである。議論では、多数決がマイノリティの声を無視しがちな点に同意したうえで、ドント方式を用いた比例代表制にすることで一部の問題は解決するのでは、という結論に至った。一方で、ドント方式は経済理論においてはどのようにサポートされるかは聞く時間がなかったため、もう少し深く自分でも考えてみたい。 **Josh Angrist 教授**: 幸運にも Next Gen Session に参加し自分の研究をノーベル賞受賞者の前で発表する機会を得ることが出来たのは、今回の滞在で最も思い出深く有益な時間であった。私のセッションには Angrist 教授の他に Thaler 教授と Milgrom 教授が参加されたが、後者二人は理論研究が中心なため、有益なコメントや質問等は主に Angrist 教授から頂くこととなった。私の報告は、現在最も力を入れている研究である、「南アフリカにおけるテレビ放送が文化多様性や国家統合に与える影響」についてである。この研究は Angrist 教授の 1990 年代の論文を引用しているだけでなく、Angrist 教授の研究手法全般からも多大な影響を受けているため、本人を前に研究報告をすることは非常に緊張した。こうした機会が得られるのはリンダウ会議ならではだと思う。Angrist 教授は分かりにくい報告に対してはすぐに報告を止めさせて「この研究の問いは何か?」や「この研究の識別戦略は何か?」と確認の質問を続けるが、私の報告においてはスムースに進み理解もしてもらえたため、しっかり練習して臨んだ甲斐があったと思う。Angrist 教授を始め多くの参加者から頂いたコメントは、本研究をさらに推し進める大きなモチベーションに繋がった。

３．諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。
自分の研究興味に近い人を出来るだけ見つけ交流することを心掛けて会議に参加した。まず、私の現在の研究対象である南アフリカ出身の研究者と多くの議論を重ねた。私の研究で文化的背景について見逃している点はないか、何か直感と違うことを言っていないか、今後さらに研究を発展させるためのヒントはないかを広く議論することが目的であり、実際にその目的は予想以上に達成された。南アフリカの大学事情や結婚市場に関して今まで知らなかった話を複数聞くことができ、現在行っている研究や将来の新たな研究に非常に有益なコネクションを作ることが出来た。また、同様に現在新しく研究可能性を探っているモンゴルの砂漠化についても、データ収集に協力してくれる可能性のある現地の研究者を見つけることが出来た。さらに、以前から利用したいと考えていたスウェーデンのデータの利用可能性について、スウェーデンの研究者と議論することもできた。スウェーデンは行政データの研究者への公開において世界最高レベルであるが、スウェーデン国外の研究者がデータにアクセスすることは難しい。そこで私の研究テーマにおいてスウェーデン人研究者と協力できる可能性を探していたところ、関心がとても近い研究者を見つけることが出来、共同研究の可能性について話し合うことが出来た。 もちろん、こうした学術的な便益を抜きにしても新たな友人が世界各国に出来たのは大変喜ばしいことである。

４．日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。
日本人の参加者の多くは同じホテルに滞在していたため、ホテルでの朝食や会議開始前後の空き時間などで多くの交流をすることが出来た。私自身は米国で博士号を取得し、リンダウ会議終了直後に日本国内の大学に着任することが決まっているが、他の日本の参加者は日本国内の大学で既に教員をされている方や行政機関で研究職をされている方、欧州の大学で研究をしている方、国際機関でエコノミストをされている方など、私とは異なるステージ・機関で働いている方が多く、色々な職場の話を聞くことが出来た。特に日本の大学における学内業務の在り方と海外研究機関の在り方の違いは非常に興味深く、日本の大学が学べることは多くあるのではと思った。今後も行政データの活用や共同研究、研究報告への招待等を通して関わりつつけていくであろう方々と多くの議論を交わせたのは非常に有益であった。

５．特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム（イベント）を3つ挙げ、その理由も記載してください。
Next Gen Session: 自分が報告する機会を得てノーベル賞受賞者をはじめとする多くの研究者からフィードバックやコメントを得ることが出来たことがとても有益であった。また、それぞれの発表時間はとても短かったが、他の研究者の発表を聞くことで参加者の誰が自分と近い興味を持っているかを知ることが出来たため、ランチ等の休憩時間に話しかけに行く際にとても有益であった。 **ノーベル賞受賞者とのランチ**: 受賞者は常に人に囲まれており話しかけるのは難しい中、ランチは参加者が 10 人と限られていたため自分の問題意識を含めフランクに話しかけることが出来た。また、他の参加者も比較的近い興味の人がランチに集まっていたため、とても興味深く有益な議論が出来たと思う。 **参加者のパネルディスカッション**: 大勢の前で議論をするという特性上表面的なことしか話せないセッションも多かったが、研究者のバックグラウンドやノーベル賞を取るに至るまでの経緯に関する話はとても興味深かった。一部の研究は本来の問いに対する副産物として出てきたものであるということも知り、自分が扱っているデータと注意深く向き合うことの大切さを再度確認した。

６．その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕
一番有益だったのは、各国の若手経済学者との議論だったと思う。3 ページの第三項にも書いた通り、私は自分の研究に近そうな研究者・自分の研究対象とする地域の研究者と意図的に多く関わるようにした。結果として、現在既にそれらの地域でのデータ収集に協力してもらう話が出ていたり、共同研究を今後進めていくためのオンラインでの議論を始めたりしている。今後研究予算を手に入れることができた際には、これらの国を実際に訪問し新たなデータの収集を始めたいと考えている。また、ノーベル賞受賞者の方々がこれまで研究に向き合ってきた姿勢や情熱は、自分が研究を進めていく良い参考になった。彼らの姿勢を間近で見られたことは、今後研究活動を進めていくうえで大きなモチベーションになった。

7．リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。
参加を通して得られた新たな研究者のネットワークやノーベル賞受賞者から学んだ研究への向き合い方を通し、自分の研究を進め成果をあげることがなによりも大切なことだと考える。経済政策や人間行動の理解を推し進めていくことが、社会科学を学ぶものとして社会に貢献する最大の方法だと思うからである。こ自分の知人や研究仲間にも今回の経験を幅広く共有し、周囲の研究者のモチベーションにもつながればなお幸いである。

8．今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ
大勢の若手経済学者が世界中から集まっているため、他の人に話しかけることを躊躇してしまうこともあるかもしれない。しかし、ほかの参加者も同様に周りに知り合いがほとんどおらず状況は同じだと思うので、積極的に色々な人に話しかけに行きネットワークを広げるのが良いと思う。また、配布される Participant Directory を活用し自分と興味の近い研究者に先に目星をつけておくのも良いかもしれない。Bavarian Night では自分の文化的衣装を着用することが推奨される。多くの人が着替えず会議参加時の格好のままでいるが、着替えていくと多くの人に声をかけてもらえるため会話を始める良いきっかけになった。（私も浴衣を持参した。）いわゆる「エレベータートーク」のように、自分の計画を短く要点をつかんで伝えられる練習はリンダウに向かう前にしておくと良いと思う。短い時間で自分の研究に興味を持ってもらえれば、その後の交流にもつながりやすいと思う。朝から晩までプログラムがぎっしりと詰まっているため、休めるときにしっかりと休むことも大切だと思う。

（以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。）